O1-31

慢性期意識障害における意識レベルとADLの検討

木沢記念病院 中部療護センター

○岩井 香織、和田 哲也、浅野 愛子、細江 誌乃、槇林 優、浅野 好孝、篠田 淳

【はじめに】意識障害患者の作業療法(以下、OT)は馴染みが薄く、訓練自体も難渋するケースが多い。その要因として、OTは主に作業活動を媒介としてADLに必要な機能の維持・改善を図ることが挙げられる。当センターでは、交通事故により頭部外傷後遺症を呈した重度の慢性期意識障害患者を入院対象とし、意識障害患者におけるOTを模索してきた。その結果、ADLが飛躍的に改善した症例も経験したが、その改善をOT開始時から予見できるかどうかは非常に重要な命題である。そこで今回、OT開始時と退院時の意識レベル(覚醒度)・ADLを調査し、OT開始時にADLの予後予測が可能か否か検討したので報告する。

【対象と方法】対象は当センターでOTを実施し、H17年～H21年2月に退院した慢性期意識障害患者33名。意識レベルの評価には、慢性期意識障害の覚醒度評価法であるWestern Neuro Sensory Stimulation Profile(以下、WNSSP)、ADL評価にはFIMを用い、OT開始時と退院時のWNSSP・FIMを調査・検証した。

【結果と考察】調査の結果、意識レベルとADLには相関があること、OT開始時の意識レベルと退院時の意識レベル・ADLの間には明らかな関係は存在しないことが分かった。以上より、OT開始時に意識レベルのスコアが悪くても、それが退院時まで継続するとは限らず、ADLとともに改善する可能性もあると推察された。今回の結果を受け、退院時にADL能力を最大限に発揮させるためには、意識レベルの変化に応じたADLへの関り方を検討する必要があると考えられた。